

建国大学の思い出など

六期 安達三季生

(1) 建国大学の思い出をいくつか思い出すままに書かせて頂きます。建国大学に入学して

直感的に思ったことは、同級生の皆さんが大人びて、しかも人物の器が大きい人が少なくない

と思ったことでした。それは日系の学生だけでなくいわゆる満

系についても当てはまります。

入学当時、塾の当番だった萬叢

山君など、特に光る存在でした

(彼は後に北京大学社会科学学院

の日本研究の責任者の重責につ

いています)。わたしは早生ま

れで、学年でも一番年が幼かつ

たこともありましたが、幼稚な人

間だと気付かされました。同級

生の皆さんに負けないように一

生懸命背伸びをして暮らしてい

る感じでした。この気持ちは、

皆に負けないように、生涯、自

分なりに高い志をもって生きよ

うという励ましにもなったと思

います。わたしにとって建国大

学に入学した最大のメリット

だったと思います。

わたしは早生まれのために徴

兵されてはいませんでしたが、

終戦間際にソ連が越境してきた

とき、防衛召集で徴兵され、そ

の晩徹夜で、ソ連の戦車隊を迎

え撃つために戦車壕を掘らされ

ました。幸いにソ連の軍隊の到

達が遅れたために、戦車隊の来

る前に終戦になり、シベリア送

りにもならず、翌年、無事に日

本に帰ることができました(同

期生の多くは徴兵によって終戦

当時、国境部隊に配属され、そ

のため戦闘で戦死したり、シベ

リア送りになって大変苦労しま

した。同窓生のなかで一番、割

りをくった学年でした)。わた

しは戦後の一年間は幸いにも、

建国大学当時、グライダー部に

在籍していた縁で、グライダー

部の指導をされていた、三期生

の山川節先輩の実家で世話にな

り、満洲中央銀行の社宅に(中

銀の臨時職員という形で)住ま

わせて頂きました。父君は欧州

航路船の事務長を経て中央銀行

直営の倶楽部の事務長をされて

いた方でした。三期の柴田勝彦

氏、七期の吉岡照明君、鶴巢劬

君も世話になりました。翌年八

月、引き揚げてから、もう一度

学生生活をやりなおそうと決心

し、幸いに旧制第三高等学校の

編入試験をうけて合格し、三年

文甲に編入させてもらいまし

た。大学在学中に司法試験も

通っていただきましたので法曹界への

途を選ぶ予定でしたが、卒業間

際に偶然、東大法学部の大学院

特別研究生に採用していただき、

適性については自信はな

かったけれど、学者の自由な生

活に惹かれて研究生生活を選び、

川島武宜教授、来栖三郎教授の

もとで民法研究に専念しまし

た。四年後に法政大学に移り、

定年で退職して、もう十八年に

なります。退職後まもなくに脳

梗塞をわずらって半身不随にな

り、その後心筋梗塞で二度手術

を受け、さらには左脚の動脈梗

塞のため血管入れ替の大手術を

受けるなど、満身創痍の体とな

りましたが、その間も研究生活

を続け、しぶとく生き残ってい

る感じです。

(2) 建国大学時代の思い出を、

特に、そこで学んだ授業の

ことを中心にいくつか書かせて

頂きます。

建国大学に入学して最初に聞

いた講義だったとおもいます

が、斉藤毅先生(後に国会図書

館の副館長になられました。た

しか昭和二十四年当時、当時国

会図書館で使っていた赤坂離宮

の一室で、初めての六期生の同

級会を開かせてもらいました。

その時、森克己先生とも話を交

わした記憶があります)国文学

の講義でした。本居宣長の国文

学について話されたこと記憶して

いますが、おそらくは研究した

ばかりのテーマで講義されたの

ではないかと思いますが、内容

がむつかしく、なかなかついて

いけない感じでした。この感想を同塾だった伊藤肇君にもらしめました、彼の反応は、大学の授業はむずかしくてよくわからない位がよいので、全部わかるような講義だと有り難みがないのだ、と教えてくれて、なるほどそういうものかと納得したのをおぼえています。もっとも中山先生の数学の授業は、無駄の無い明晰な名講義で、完全に理解できました。六塾の塾長だった森克己先生は、日本中国の交流史の大家で九州大学、東北大学の教授になられた有名な学者ですが、その東洋史の講義の中でおっしゃった文句ですが、近代に至って「アジアの平和の花園は西欧列強によって無残にも踏み荒らされたのであります」という言葉は、その後日本に帰って西洋近代の社会思想史政治史を勉強するようになってからも頭に染み付いて忘れられない名文句でした。

それから建国大学の授業で大きな感動をおぼえたのは、先生のお名前は忘れましたが、いわ

ゆる「壬申の乱」のことを初めて教わったときです。天智天皇の死後、天皇の位をあらそって天皇と叔父とが戦い、天皇が破れて自害し、叔父が天武天皇の位についたということ（それ程露骨な表現ではなかったが）教わったとき、それまで小学校・中学校では専ら「万世一系」の天皇の統治が代々続いていると教え込まれ、信じきっていたのが、崩れ落ちる感じで大変驚きました。このときの感動をよく覚えています。

それから森信三先生の授業のときに、先生がおっしゃった言葉で、忘れられないのは、著作が五十年の後に読まれるような書物を書くようにしなければならぬ。価値のある著書はそのような著書だ。といわれたのがずっと記憶に残っています。特にわたしが自ら学者の道を選んだから絶えず思い出す言葉です。なお先生が建国大学に来られる前、天王寺師範の先生だった当時の講義の記録が二、三年前、したがって最初の講義

の時から八十年後に、「修身」という表題で市販された書物が最近ベストセラーにもなったことを考えると、ご自分の言葉を自ら実現されたわけで、すごい先生だったと思い、感慨深いものがあります。

それからこれは山川先輩から、また聞きで聞いた話で印象ふかい言葉ですが、建国大学の後期で経済学を担当されていた黒松先生は、日本に帰られてから同志社大学の教授になられたと聞いていますが、黒松先生は、講義の途中で急に講義を中断され、これから先のことは、自分の研究が進んでいないから、話すことができない。ここで講義を終わりにするといって退席されたというはなしです。大学の講義というものはこういうものでなくてはならないのだらう、とわたしは感心して聞きました。

グライダー部に在籍していた当時、山川先輩から勧められて、図書館の書庫に入って、河上肇の「第二貧乏物語」を探し

て見付けました。当時、閲覧禁止になっていた書物でしたが借りて読むことができました。伏せ字だらけの本でしたが、ぞくぞくしながら、夢中になって読みました。社会の真実が書かれているに違いない、もっと勉強しなければならぬという思いでした。

なお山川さんのことにもう少しふれますと、山川さんは、経済学関係の多くの蔵書を所有され、満洲国成立の前後の時代の満洲の貨幣制度の研究をし、多くの資料を収集されておりました。建国大学では、後に東京大学の経済学部の教授で学士院会員にもなられた一期生の中川敬一郎さんなどと、一緒にケインズの「一般理論」の輪読会もされていたと聞きました。ロシア語も堪能で、中央銀行の社宅に侵入してきたソ連兵ともロシア語で対等に応接できる語学力とそれに胆力がありました。

山川さんは学者になるに真に相応しいお方でしたが、ご家庭の事情で断念されたのは惜しい

ことでした。

(3) わたし自身の仕事のことを少しふれますと、わたしは自分しかできない仕事をしたと考えてやってきました。そして最初は戦後の農地改革の源流を探る目的で、大正期以後の小作立法の研究を志し、その手始めに、大正十四年に制定された小作調停法の立法とその施行の過程を実証的に研究しました。

これは勦草書房の「近代法発達史講座」に収録されています。その後、この研究を通して得た法社会学的手法で法解釈学の研究を試み、民法の債権譲渡と手形・小切手法をつなぐ抗弁切断の法理を研究し、ドイツでの留学期間中に「手形・小切手法の一般理論」をヨーロッパ大学双書の一冊として発表しました。

これはドイツで二百数十年もの間、激しく争われた（わが国でもその驥尾に付して盛んに争われた）問題について、ドイツの学説を批判し新しい説を主張した論文ですが、わたしからいうのはおこがましいのですが、ドイツでは高い評価を与えられ、教科書や注釈書で引用され、専門の学術誌でも取り上げられました。その後この研究の延長にある研究として、銀行振り込みや口座振替え、さらにはJデビットの基本構造についての研究を続けて現在に至っています。

(4) 前記の文章は、先日の建国大学解散の総会に出席する前夜、私の建国大学の思い出を自分なりにまとめたものです。解散の総会は、大変意義深い集まりだったと思います。皆さんの発言はそれぞれ興味深く拝聴しましたが、とりわけ一期生の先川先輩のお話によって、これまで知らなかった、日系以外の方々を含む一期生の華々しい活躍の様子を知り得たことは大きな収穫でした。また当日配付された、村上和夫先輩の手紙のコピーで、小林軍治先輩のことを知り感動しました。偉大な先輩を持ったことは、後輩として大変名誉なこと、身のひきしまる思いです。

(5) 総会が終わったあと、六期生の十名足らずの同級生が別室で懇談会をもったとき、話題が最近の日中、日韓関係に移りました。全員が強い関心を抱いている問題であることがわかりました。これに関連して一言のべますと、わたしは、今から十六年前、勤務校を退職した年でしたが、七期生の皆さんが旧満州に団体で旅行されたときに、当時世話役だった上田喜久さんに声をかけて頂き、団体に加わらせて頂き、旅順、大連、瀋陽、長春、ハルビンを訪ね、現地の皆さんとの交流会に出席しました。とくにハルビンでは数十名の同窓生が出席してくれて感激しました。各地での交流会の席上、わたしは僭越ながら皆さんを代表して挨拶し、その中で日本が中国を侵略したことを日本国民の一人として謝罪する旨を付け加えました。（当時は石原都知事の発言、尖閣列島問題のおきる前のことです）。

た。主観的な感懐ではすまされない客観的な歴史認識を考慮したものでなければならぬと覚悟した決断でした。前述した森克己先生が講義の中で述べられたこと（それは満系の学生も聴いているはず）をそのままに受け入れていたことに対する反省でもあり、身をもってする回答でもありました。わたしは発言した当時も今も複雑な気持ちですが、この言葉を現地の同窓生の皆さんに発言する機会が得られたことを今も有意義だったと思います。

いづれにせよ、日本が世界史の主役の一人だった歴史の激動期において、多感な青春時代に民族協和を目指す実験的、意欲的な教育を受けた貴重な場面を体験したことを思い、大袈裟に言えば、体をはって世界史の直っ口中を過ごしたと思ひ至り、感慨深いものがあります。

（注・本稿は「建国大学同窓会報」第94号（最終号）から転載させていただきます）